

保育者養成校における学生のピアノ習熟度と GPAの関係

河野 久寿・内田 雄

(2020年2月28日受理)

The relationship between GPA (grade point average) and piano proficiency of students in nursery teacher training school

Hisatoshi KAWANO・Yu UCHIDA

要旨：仁愛女子短期大学幼児教育学科1回生学生を対象としたアンケートを実施し、ピアノ経験歴、日頃の練習時間などを調査し、ピアノ科目成績とGPAとの相関などを分析することによって、ピアノ習熟度と学力の関係や、様々な角度から統計的解析を行った。結果、学生のピアノ習熟度とGPAは関係がある事が分かった。また、ピアノ練習時間とプラス点および音楽成績に有意な関係が認められた。

Key words：保育者養成校 (Nursery teacher training school) ピアノ教育 (Piano education)
アンケート調査 (Questionnaire survey) GPA (grade point average)

1. はじめに

昨今教育の現場では音楽教育が重視されない傾向があり、保育所保育指針にも「ピアノ」という文言も出てこない。しかし、保育の現場の意見としてピアノをもっと弾けるように、歌がしっかり歌えるようにという要望は、学生の実習訪問指導の場にて現場の先生より多く聞かれ、また、仁愛女子短期大学による卒業生の就職先アンケート調査でも、学生がもっとピアノを弾けるようにと、保育の現場から短大への要望が毎年のように寄せられている。幼稚園・保育所での採用試験は、依然としてピアノ技能を問われることが多い。衣川ら（2016）の調査によれば、2013年、2014年の採用試験では、実技試験と面接試験の割合がほぼ半数である。さらに、実技試験の半分以上が音楽関係で、そのうちの7割がピアノ実技を実施し、その課題曲はバイエル・ブルグミュラー・ソナチネ・ソナタの教則本が重視されている傾向が見られる¹⁾。保育所・幼稚園は慣習的にピアノ演奏技能を採用の基準にしており、保育者養成校もそれに沿った教育を行っている。

そもそも、幼児の学びを考えると、音楽からの学びは大きく、梅本（1999）が「何よりも音楽は子どもにとって遊びの一種である」²⁾と述べているように、幼児期の子どもの生活や成長にとって音楽が必要不可欠なものである。ハンガリーの作曲家で、音楽教育者としても今日まで多大な影響を与えるコダーイ・ゾルターンが「子どもが最初の6年間で聞いたものは、あとになって消すことができない」³⁾と述べているように、子どもにとって音楽は非常に重要なものであ。したがって、幼児教育に関わる保育者の音楽的能力が子どもに与える影響は大きいと考えられる。

村上ら（2017）の調査によると、学生（保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭の資格・免許取得希望者対象）の96.8%がピアノ実技を必要と回答している。その理由についても、就職試験や現場で必要と感じている学生がともに80%を超え、加えて子どもの学習に活用したいと考えている学生も過半数を超えていた⁴⁾。このように、学生自身もピアノの必要性はしっかり認識していると言える。

本学幼児教育学科（以下、本学）における学生のピアノ習熟度は低下している状況にある。その原因の一つとしてピアノ初心者（入学時全くピアノが弾けない学生）の増加がある。本学のピアノ初心者の年次推移は、は、平成24年度31.2%、平成25年度33.5%、平成26年度37.5%、平成27年度38.4%、平成28年度44.1%、平成29年度46%と推移している。年々、初心者の比率が増え、高いレベルの学生の比率も下がることから、自ずと学生全体としてのレベル低下に繋がっていると考えられる。ピアノ演奏技術習得には時間が掛かる。入学前にピアノ教室等に習いに行く、または習ったことがある、準備があるか無いかで、入学後の進捗にも影響がある。

こうした状況の中、本学では学生のピアノ演奏技術向上のために、学生にとってのより良い学習環境作りとして、個人レッスン室や練習室、ML教室設置など、その充実を図ってきた。また、幼児教育学科科目「音楽（ピアノ基礎演習）」においては、学生のピアノレベルに合った形で、より細やかな指導に繋がられるよう5つのグレード分けを行い、個人レッスンおよびML教室による集団演習の2つの形を併用して、学生へ向き合った手厚い指導を行っている。単位習得の条件としては、通年における4回の実技試験成績、そして、グレード毎の教材の中で規定の曲数全ての習得が条件となっている。履修するにあたり学生のハードルとなるのが、各試験と規定の曲数をこなすことである。特にピアノ初心者にとって、決められた多くの曲数を通年通して“コツコツとこなしていく”事が苦手な学生は多く、休みがちになり習得が遅れていくという流れにも繋がっている。

本学では初心者用の教本としてバイエルピアノ教則本を使用している。バイエルは初心者向け教材として最適であり⁵⁾、初心者が基本的なピアノ演奏技術を習得するためには、バイエル全曲を弾きこなせる程の練習量が必要であろう。しかし、荻田(2012)が「幼児、児童への指導者を志す者は、ピアノ演奏の技能を習得するために十分な練習を積むことが要求される。しかしながら、幼児・初等教育の指導者養成校である短期大学や4年制大学の教職

課程に在籍する学生が、卒業時までには教育現場のニーズに充分に応え得る技能を身につけることは、甚だ難しいように思われる。』⁶⁾と述べているように、特にピアノ初心者においては、授業が行われる短い期間にて、全ての学生を現場が求めるレベルに達成させるのは困難であると言える。本学での初心者を対象としたグレードの規定曲も、バイエルからの抜粋による選曲である。限られた曲のみの練習も学生のピアノ習熟度に影響するところであろう。

保育者となる学生自身がしっかり楽譜を読み、就職してからの限られた時間の中で準備をして、子どもに合った形での弾き歌いができる為には、やはりできるだけ多くの楽曲をそれなりの練習量を持って弾きこなし、ピアノテクニックのセオリーを学び、習得する事が大事であり、これらの事が保育者として務めてからの更なる応用に繋がっていくと考えるものである。しかし、前述した通り、ピアノ演奏技術習得のためには、十分な練習量を積むことが必要である。履修科目が多い短期大学の保育者養成課程としては、学生自身が練習を積む時間を確保し、ピアノの練習に真摯に継続的に取り組む姿勢を持つことがピアノ演奏技術習得に必要な要素であろう。こういった学生自身の姿勢・素養は、ピアノ技術習得のみならず、他の授業科目成績にも表れている可能性がある。GPA（Grade Point Average：高等教育機関における主要な成績評価指標）の強い予測因子として出席率が挙げられているように⁷⁾、授業を休まず、コツコツと真面目に取り組むという姿勢は様々な授業科目成績と関連している。このように、ピアノ演奏技術習得のために、継続的かつ十分な練習を積める学生はGPAも高い可能性がある。

本研究は、1回生学生を対象としたアンケートを実施し、ピアノ経験歴、日頃の練習時間などを調査し、更にはピアノ科目成績とGPAとの関係を分析することによって、保育者養成校におけるピアノ演奏技術習得を目指した学生の姿を明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

本研究では、仁愛女子短期大学幼児教育学科の1

回生を対象にピアノ経験等の調査を実施した。

(1) 調査対象者

仁愛女子短期大学幼児教育学科1回生99名を対象にピアノ経験等に関する調査を実施した。調査対象者には、本研究の目的や方法を説明し、以下の事項を本研究に使用する旨の同意を得た。

- ・ピアノ経験等に関する調査票内容
- ・音楽（ピアノ基礎演習）の科目成績
- ・Grade Point Average (GPA) データ

調査票未記入者、およびの記載漏れのある18名を除いた81名を本研究の解析対象とした。

(2) 調査内容および解析使用データ

1. ピアノ経験の有無

短大入学までのピアノ経験歴（年）を調査した。

2. ピアノ練習時間

週当たりの練習日数および時間を、短大入学後の前期期間（4月上旬～7月下旬）、後期期間（9月下旬～1月下旬）、および長期休暇中の3期間に分けて調査した。練習日数と時間の積をピアノ練習時間（時/週）として算出した。

3. グレード

音楽（ピアノ基礎演習）では、学生のピアノ習熟度を踏まえて、5つのグレードに分けて授業を実施している。グレード1（G1）は初心者、グレード2（G2）は初級者を、グレード3,4（G3,4）は中級者を、グレード5（G5）は上級者を対象としている。各グレードのレベルに合わせ一定数の課題曲が設定される。なお、G4（ $n=7$ ）およびG5（ $n=4$ ）は対象者が少なく、ピアノ習熟度も高い水準にあるため、本研究では一つのグループとして取り扱う（G4-5）。ピアノ未経験者の多くが（約85%）がG1に所属している。

4. 音楽（ピアノ基礎演習）成績

音楽（ピアノ基礎演習）ではグレード毎に設定された一定数の課題曲を習得することを課している。設定された課題曲に合格した上で、前期後期に各4回の実技テストを実施する。実技テストでは、自分で選択した課題曲、および弾き歌い曲を

演奏する。音やリズムの正確さ、演奏のなめらかさ、テンポの適切さ、表現の豊かさ等の観点から評価される。

音楽（ピアノ基礎演習）の成績は、4回の実技テストの平均点（ピアノ成績）により算出されるが、各グレードに設定された課題曲以外の曲を追加で合格することで1曲につき1点加点（プラス点）を与えている。ピアノ成績とプラス点の和が最終的な成績となる（音楽成績）。本研究では、ピアノ成績、プラス点および音楽成績を解析に用いた。

5. GPA

本学における授業科目はS～Eの6段階で評価され、Cまでが単位認定となる。S～Cの各成績に4～1点を付与し（D、Eは0点）、それに単位を掛け合わせたものがGP（grade point）となる。調査対象者の全履修科目の内、放棄科目を除いた科目成績のGPの平均をGPAとして本研究の解析に使用した。

(3) 解析方法

全調査対象者、およびG1学生を対象にGPA、各調査項目、音楽関連成績間の関係をピアソンの積率相関係数により検討した。また、グレードによる各調査項目、音楽成績、GPAの違いを対応のない要因分散分析により検討した。有意な主効果が認められた場合、Bonferroni法による事後比較検定を実施した。加えて、G1における未経験者と経験者の差を対応のないt検定により検討した。本研究における統計的有意水準は5%とした。

3. 結 果

表1は全調査対象者における、表2はG1学生におけるGPA、各調査項目、音楽成績間の相関係数を示している。全調査対象者においては、GPAとピアノ点数および音楽成績との間に、G1学生においては、GPAと練習時間（長期休暇）の間に有意な低い相関が認められた。また、ピアノ練習時間（前期・後期）は全調査対象者およびG1学生のいずれにおいても、プラス点および音楽成績と有意な関係が認められた。

表1 GPA、各調査項目、音楽成績間の関係

	n=81							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①GPA								
②ピアノ成績	0.27 *							
③プラス点	0.19	0.72 *						
④音楽成績	0.23 *	0.87 *	0.97 *					
⑤ピアノ経験歴	0.01	0.71 *	0.50 *	0.61 *				
⑥ピアノ練習時間（前期）	0.20	0.20	0.23 *	0.24 *	0.15			
⑦ピアノ練習時間（後期）	0.16	0.19	0.23 *	0.24 *	0.21	0.91 *		
⑧ピアノ練習時間（長期休暇）	-0.17	0.12	0.10	0.12	0.16	0.68 *	0.65 *	0.65

※ *: p<0.05

表2 GPA、各調査項目、音楽成績間の関係（G1のみ）

	n=34							
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①GPA								
②ピアノ成績	0.15							
③プラス点	0.17	0.77 *						
④音楽成績	0.17	0.85 *	0.99 *					
⑤ピアノ経験歴	-0.08	0.33	0.28	0.30				
⑥ピアノ練習時間（前期）	0.22	0.29	0.37 *	0.37 *	0.02			
⑦ピアノ練習時間（後期）	0.09	0.31	0.40 *	0.39 *	0.11	0.82		
⑧ピアノ練習時間（長期休暇）	-0.37 *	0.11	0.11	0.11	-0.12	0.36 *	0.28	

※ **: p<0.05

表3 グレード別の音楽関連成績、練習時間およびGPA

	グレード1 (n=34)		グレード2 (n=16)		グレード3 (n=20)		グレード4-5 (n=11)		F-Value	P-Value	Post-hoc(Bonferroni)
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
GPA成績	2.47	0.45	2.63	0.42	2.40	0.39	2.61	0.63	1.01	0.39	
プラス点	0.66	1.51	5.03	3.82	7.45	3.87	11.91	3.94	44.706	0.000 *	1 < 2,3,4-5 2,3 < 4-5
ピアノ成績	61.63	14.93	76.32	6.68	81.92	7.54	88.52	8.60	22.958	0.000 *	1 < 2,3,4-5 2 < 4-5
音楽成績	71.07	3.11	75.94	3.84	78.82	4.31	82.34	5.32	30.634	0.000 *	1 < 2,3,4-5 2 < 4-5
プラス曲	-9.44	12.41	0.38	4.22	3.10	4.20	6.18	4.35	14.088	0.000 *	1 < 2,3,4-5
ピアノ練習時間（前・後期平均）	2.36	1.34	2.56	2.01	2.97	2.26	3.91	3.81	1.515	0.217	

※ *: p<0.05

表4 グレード別 経験者数および比率

	経験者数		経験者比率
	あり（人）	なし（人）	
G1	11	23	32.4%
G2	14	2	87.5%
G3	18	2	90.0%
G4-5	11	0	100.0%

表5 G1におけるピアノ経験者と未経験者の差

	経験あり (n=11)		経験なし (n=23)		t-value	p-value
	Mean	SD	Mean	SD		
GPA成績	2.40	0.36	2.50	0.49	0.56	0.58
ピアノ成績	72.04	3.18	70.61	3.04	1.27	0.21
プラス点	-5.36	10.33	-11.39	13.04	1.34	0.19
音楽成績	66.68	12.62	59.21	15.60	1.38	0.18
練習時間（前期）	2.22	1.21	2.67	1.44	0.91	0.37
練習時間（後期）	2.08	1.53	2.26	1.43	0.34	0.74
練習時間（長期休）	1.91	1.80	2.40	3.09	0.49	0.63

表3はグレード別の音楽関連成績、GPA、練習時間の差を示している。音楽関連成績に有意な差が認められ、G1が他のグレードよりも有意に劣っていた。表4はグレード別のピアノ経験者数および比率を示している。G1における経験者比率が32.4%であるのに対し、他のグレードでは8割以上が経験者となっている。

表5はG1における経験者と未経験者のGPA、音楽関連成績、練習時間の差を示している。経験者・未経験者間でいずれの項目にも有意な差は認められなかった。

4. 考 察

保育士養成校における学生のピアノ習熟度（ピアノ成績、音楽成績）とGPAは関係がある事が分かった。この事は、ピアノ習熟度が高いと学生の学力も高い事を示している。本学1回生が通年でおおよそ45単位以上を取得している現状を考えると、音楽（ピアノ基礎演習：2単位）の成績自体が全体のGPAに与えている影響は小さく、両者の関係の程度は低い、明確な関係があると考えられる。ただ

し、この結果は全調査対象者を対象とした場合であり、G1学生に限定した場合は両者の関係が認められていない。音楽（ピアノ基礎演習）の授業では、グレード間のピアノ成績の差は大きく、G1学生に絞った場合、ピアノ成績のばらつきが小さくなったことが両者の関係が認められなかった一つの要因として考えられる。

G1学生において、GPAと練習時間（長期休暇）の間に有意な低い相関が認められた。これは、長期休暇中に意欲的に練習する学生は、全体的な学業成績の向上と関連している事を示している。本学1回生は前期後の夏季長期休暇中に、仁愛女子短期大学附属幼稚園での実習が行われ、園児の前で必ずピアノを弾く事が求められる。長期休暇中に意欲的に練習するという事は、実習に向けての練習をしっかりと行っているとも考えられ、学ぶ姿勢・意欲も高い事が推察される。こういった姿勢がGPAの高さにも関連している可能性がある。

また、ピアノ練習時間（前期・後期）とプラス点および音楽成績が、全調査対象者およびG1学生のいずれにおいても有意な関係が認められた。この事

は、練習時間がピアノ習熟度に関係している事を示している。練習時間が練習量・練習密度に直結するかどうかという点はあるが、練習時間＝練習量と定義すれば、練習量がそのまま音楽成績、ピアノ習熟度へ直結しているという結果である。

これらの事は、ごく当然の結果であろうが、長年学生の姿を観察した中で、ピアノを頑張っている学生は成績も良いのではという想定はその通りの結果であり、学生の取り組む姿勢・能力が成績に影響を与えるものである事が明らかになった。

結果、ピアノ初心者がピアノ習熟度を上げるには、練習時間・練習量をどれだけ確保するかが鍵となる。アンケート結果での練習時間は個人的予想よりも多いものであったが、その習熟度から鑑みて、まだまだ不足していると言わざるを得ない。

昨今学生の質の低下が議論となり、学生の実習訪問指導等での現場の先生方との話でも、学生は質が下がっているとの声が多く聞かれる。幼児期の子どもの生活や成長にとって、必要不可欠なものである音楽を実践するための基本であるピアノ教育は、その質向上のためにも強化すべき項目である。

教育の現場での音楽教育軽視の現状において、本研究結果からの提言として、今一度ピアノ教育・音楽教育の重要性を問い掛けたい。

引用文献

- 1) 衣川久美子 山崎和子 由井敦子「幼稚園・保育所（園）・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向－総合子ども学科 2011 年～2014 年の求人票の経年分析と就職状況－」, 甲南女子大学研究紀要, 人間科学編(52), 59-78, 2016
- 2) 梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会 61, 2003
- 3) 中川弘一郎編・訳「コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践～生きた音楽の共有をめざして～」全音楽譜出版社, 東京, 151, 1980
- 4) 村上玲子・三島瑞穂「保育者養成校における教科目「保育表現技術」の捉え方と課題－音楽担当者の立場からの考察」宇部フロンティア大学短期大学部人間生活科学研究紀(53), 21-31, 2017
- 5) 河野久寿 木下由香 西尾順子 太田佳代 福田安希子 福岡智子 清水由紀子 大城修子「保育者養成ピアノ教育における教材の再検討～福井県内ピアノ講師に対するアンケート調査、バイエルとの比較」仁愛女子短期大学研究紀要(50), 43-62, 2018
- 6) 荻田泉「幼児・初等教育の指導者養成におけるピアノ指導法の研究－初心者の学習意欲を 高める教授法について－」『四天王寺大学紀要』(53), 215-232, 2012

- 7) 垂門伸幸「修学支援に活用する指標の検討とその活用方法－出席率とGPA の関係に注目して－」京都産業大学高等教育フォーラム(5), 137-145

参考文献

1. 「仁愛女子短期大学の卒業生に関する調査結果について」仁愛女子短期大学学生部 2019
2. 今井由恵 保育者・教育者養成におけるピアノ学習に対する意識変容に関する調査と分析 北海道文教大学人間科学部こども発達学科研究紀要(14), 97-112, 2013